

## 今村温州の二重接ぎに関する試験

磯部 暁・松田明治 (熊本県果樹試験場)

ISOBE, A., and M. MATSUDA : Effects of Interstocks on the Growth, Bearing and Fruit Quality of Imamura Unshiu (Citrus unshiu MARC.)

今村温州は果実の締まりが良く、果汁の品質も良好であるが、樹勢が強く、結果期に達することが遅いこと、隔年結果性が強いことが、栽培上の支障となっている。このため苗木養成時に、他の品種を中間台として二重接ぎをすることで、今村温州の樹態や結実性、果実の品質に及ぼす影響を検討したので、その結果を報告する。

### 1. 試験方法

1972年4月、2年生カラタチ台に、宮川早生、興津早生、田上温州、キンコウジ、小ミカン、川野なつだいだい、ハッサク、今村温州を切接ぎし、同年9月、接木部上10cmの位置に、今村温州を芽接ぎ後、苗木を養成して、1975年4月に生育良好な苗木を、各々6樹あて定植した。(なお、宮川、田上温州中間台は、試験中に枯死したため、各々5樹、ハッサクは3樹を供試)。定植後は、主幹部の生育、樹容積、樹態、収量、果汁の品質などを調査した。また、1980～1982年は葉中成分を、1983年には、エライザ法によるウイルスの検定と、試験樹の半数を解体し、接木部の解剖調査を行った。

### 2. 結果および考察

1) 定植後、1～2年の間に、ハッサク中間台は、供試樹の半数が枯死したが、これは接穂の資質が影響したものと推察される。台木部の年次別生育の推移は、若木時より、ハッサク中間台が最も旺盛で、次いで川野なつだいだい、小ミカンであり、キンコウジは最も小さい傾向を示した。中間台部は、ハッサク、小ミカン中間台の生育が良好で、田上温州、キンコウジは小さく、穂部は台木部の生育状況とほぼ同じ様相を示した。このため、ハッサク、興津早生、宮川早生の中間台部は、穂部よりも大きく、台勝り現象がみられたが、今村温州中間台では、穂部との間に生育差はみられず、キンコウジ、川野なつだいだい、小ミカン、田上温州中間台は、台負け傾向を示した。

2) 中間台木間の樹容積は、ハッサク、小ミカン、川野なつだいだいが大きく、キンコウジは最も小さく推移した。春梢の節間長は、ハッサクが長く、田上温州、キンコウジは短い傾向にあった。定植2年目の結果始めの収量は、今村温州は、ほとんど皆無であったが、単位容積当たりの累積収量は、キンコウジが最も多く、結実始めの段階から、終始、他の中間台よりも高い傾向を示した。また、累年における収穫果の1果平均重は、中間台木間において差は認められなかった。

3) 果汁の品質については、可溶性固形物、クエン酸ともに、中間台木間の差は認められず、葉中成分はMnのみに有意の差がみられた。

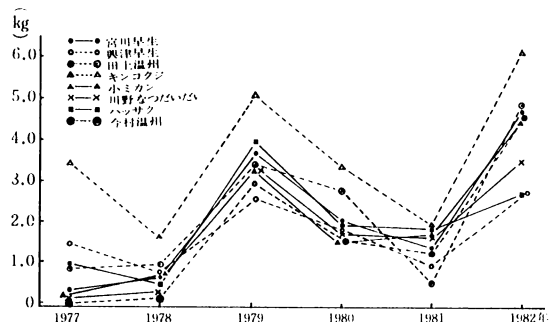
第1表 樹体、収量、品質に関する調査

中間台木	台木周 cm	中間台周 cm	穂部周 cm	樹容積 m <sup>3</sup>	収穫果 1果平均重 g	可溶性 固形物 %	クエン酸 %
宮川早生	41.9	32.4	30.8	12.8	155.2	12.47	1.017
興津早生	45.2	32.2	30.7	14.1	144.2	12.32	1.030
田上温州	38.6	26.9	28.5	13.1	149.3	12.49	1.096
キンコウジ	33.3	27.0	28.2	8.3	149.0	12.57	1.057
小ミカン	47.5	34.0	34.4	17.6	147.9	12.47	1.019
川野なつだいだい	47.8	32.9	33.2	14.6	148.1	12.61	1.095
ハッサク	53.4	37.3	34.3	19.5	123.4	13.22	0.990
今村温州	44.7	31.9	32.7	16.2	136.8	12.66	1.089
有意性	**	**	**	**	NS	NS	NS

収穫果1果平均重 (1977～1982)、可溶性固形物、クエン酸 (1977～1982年の平均)、他は1982年調

4) ウイルスの検定では、温州萎縮病は、いずれの中間台にも確認できなかったが、トリストテザは、すべての中間台木において保毒が認められた。また、解体調査の結果、ハッサク中間台には、穂部との間に、若干の不親和現象がみられたが、他の台にはみられなかった。

以上の結果から、今村温州の苗木養成時に、キンコウジなどを中間台として二重接ぎをすることにより、樹勢をおさえ、早期結果と単位容積当たり収量の増大を期待できるものと推察されるため、今後、実用面での検討を行いたい。



第1図 単位容積当たり収量の年次別推移